
秘め事と少年

光差す海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秘め事と少年

【Nコード】

N1722J

【作者名】

光差す海

【あらすじ】

小学五年生の一太は、友達と神社でかくれんぼをしている時に、二人の若い男女が不思議な行為をしているのを発見して……。性の目覚めを書いた短編文学です。

ようやく退屈な学校の授業が終わった。小学五年生の高野一太は級友達と約束を交わし、意気揚々と自宅への道を急いだ。秋晴れの空は明るく澄んで、雲ひとつ見当たらない。一太は一軒家の鍵を空け、乱暴に自分の部屋にランドセルを放り出し、買ってもらったお洒落な皮仕様の斜め掛けの鞆にNintendoのDSと幾つかのソフトを入れ、足早に家を出た。待ち合わせ場所は、駅のすぐ近くにある大きな八幡神社だ。そこで、いつものように対戦ゲームをしたり、かくれんぼなどをするのだ。行く途中に、友達の一人と合流し、今日は俺が勝つぞ、などと胸をそびやかせていた。

合計11人が集まり、西日のまだ明るい中、まず彼らはコンビニで買った菓子パンやおやつを食べながら、DSの対戦バトルゲームに勤しんだ。誰かが境内の前に設置されてある独楽像の上に跨って人気アニメの主人公の台詞を演説し皆を笑わせた。本殿の前の階段を占領している彼らの横を、一人の敬虔そうな買い物袋を下げた婦人がしかめっ面をしてすり抜け、賽銭を投げ、鈴を鳴らした後、丁寧に二礼二拍一礼をして去って行った。平日の午後でも、この神社は通り道的に使われていて、ちらほらと人が通る。風は優しく吹きぬけ、少年らは仲間内での遊戯に没頭していた。

やがて、ゲーム機をいじるのに飽きた彼らは今度はかくれんぼを始めた。いくつも建物があり、神木であろう大きな楠やその他の大木がひしめく神社の境内は、なんどしても飽きぬほどに多くの隠れ場所が存在した。一太は隠れる側になったので、まず境内の下の間隙に潜りこもうとした。ところがそこには既に先客がいた。

「恵一、どけよお」

「バーカ、早い者勝ちだ」

そう言われて一太はさすがと撤退し、次の場所、大きな石碑の後ろへ潜んだ。積もった枯葉が邪魔なので手で払い、ぴったりと裏に身を寄せた。その後ろ側には石柱がガードレールのようになっていて、向こう側にアパートのベランダが見える。エアコンの室外機の上に子猫が気持ちよさそうに眠っていた。一太は悪戯を思いついて、小石を見つけて投げた。小石は子猫ではなく窓ガラスに当たったが、子猫は驚いて走って逃げていってしまった。一太は満足して鬼を上手にかわしてタツチする方法を考え出した。

一度目は上手く行き、また別の友達が鬼になった。一太は今度は少し遠くに隠れようと思い、境内の裏手奥に一人進んでいった。記憶によるとこの奥手に稲荷神社があるはずだ。古びてペンキの剥けた幾つもの鳥居の下をくぐり、石段を登るとそこに小さな神社がある。周囲は鬱蒼とした雑木林に囲まれて、やや寂しさを感じる場所だ。この裏に隠れよう、と思っていると、ふと、妙な声があるのが聞こえる。なんだろう、と耳を澄ますと、女の人の声だ。この裏に誰がいるのか？咄嗟に一太は足音を忍ばせた。ぎりぎりまで近づいて覗き込んでみる。

「駄目よ、こんなところじゃ。服も汚れるわ」

「後ろから挿れるからさ、いいだろ」

一太よりもずっと年上の若い男の人と女の人がいた。大学生ぐらいだろうか。何をしてるんだろ？興味をもって身じろぎもせずに見ていると、男の人が女の人の胸に手を入れている。女の方は苦しそうにうめいている。一太はなぜか怒りを覚えた。いじめてるんじゃないか？思わず声を上げようとした。その刹那、二人は顔を寄せて口づけをした。一太は啞然とした。これまでもテレビドラマなどで見たことがあるが、本当に誰かがしているのを見たのは初めてだ。男の人は女の人の服を上を持ちあげた。そこには二つの膨らんだ胸があった。男の人はそれを揉んだり吸ったりしている。一太は知ら

ず知らずのうちに興奮を感じた。その行為が何を意味するのかは全く分からずに。

やがて、女の人がしゃがみこみ、男の人のズボンを降ろし、何かを啜えた。一太は驚愕した。チンコを口にくわえてるのか？小便の出る汚い場所を？一太にはそれが不潔極まりない行為に思えた。だが、目は逸らせない。男の人は気持ちよさそうに目を閉じている。

一太は、なんとも言えない高揚と背徳感を同時に感じていた。見てはいけないものを見ているんだ、と感じていた。彼の陰茎も密かに大きくなっていたが、気づかなかった。やがて、女の人はそのをやめ、社の壁に手をついた。お尻は丸出しのまままだ。一太は息を飲んだ。男の人が陰茎を立てて、そのままお尻に当てた。そして、前後に動かしはじめた。女の人には嬌声をあげた。その魅惑の声は一太の心を激しく揺り動かした。体が異常に熱い。自分の体にある魔物が入り込んで全身を煮えたぎらせているようだ。どうしたらいいのか、一太は思わず自分の股間をまさぐった。女の人のおおきな胸が揺れている。一太は目を逸らさずに見ていた。そして、右手で股間をこすった。すると、急激に快感が襲ってきた。耳に水を入れられたような、こそばゆいような、それでいて全能感すら感じるこの感覚。思わずつつ、と声を出した。途端に、何かが爆発した。一太の声に反応し、男の人がこちらを見た。目が合った。一太は、快感にまどろみながら、よろける足で立ち上がり逃げた。

誰もいない境内の裏側で、一太はそつとズボンの中を覗いてみた。真っ白な白濁液でパンツが濡れている。慌てて手を突っ込み、それをその辺りの木々に擦り付けた。まだべとべととしているので、ハンカチで拭いたら、何とかきれいにはなったが、ハンカチ自体が汚れてしまった。匂いを嗅ぐと生臭い。一体これはどこから出てきたんだ。一太は自らの生理能力にこんなものがあると知らず、一体俺の体に何が起こったのか、と怯えた。もちろん友達の話にも言えな

った。何か、恥ずかしい出来事のように思えたからだ。そつと彼らに気づかれないように別の出口から神社を出た。夕闇が迫る中、一太は火照った頬をそつとなでながら、先ほどの凄まじい快感を思い出していた。あの男女は何をしていたのだろう。誰かに、そうだ、ませてる隆志に明日聞いてみよう、正体がわかるかもしれない。駅周辺を大人が忙しく歩いている。なんだかちよつとだけ彼らに近づく体験が出来たような気がして、一太は胸を反らして歩いた。沈み行く太陽が、彼のそんな姿を照らし、薄く長い影を道に伸ばしていた。（終わり）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1722j/>

秘め事と少年

2010年10月15日23時32分発行